

三條南ロータリークラブ週報

Sanjo Minami Rotary Club



開会挨拶

三條南ロータリークラブ会長

星野 健司

三條市内4ロータリークラブ合同公開例会

蓮池薫氏 講演会

拉致と決断 あの日の決断から始まったー

市民の皆様、ロータリアンの皆さん、こんにちは。三條南ロータリークラブ本年度会長の星野です。本日は週末の大変お忙しい中、三條市内4ロータリークラブ合同公開例会にお集まりいただき誠にありがとうございます。最後までご清聴よろしくお願い申し上げます。

また、蓮池薫様におかれましては、大変お忙しい中、本日の公開例会の講師をお引き受けいただき感謝申し上げます。

ここで少し時間を頂戴し、私共ロータリークラブのご紹介をさせていただきます。

ロータリークラブは職業倫理を重んじる職業人の集まりで幅広い奉仕活動を実践している団体です。

ロータリークラブは今から 110 年前にアメリカのシカゴで誕生し、現在 200 以上の国と地域に広がり、クラブ数は 35,109 会員総数 1,235,536 人（2015 年 5 月 31 日 RI 公式発表）が在籍しています。日本全体のクラブ数は 2,269、会員数 87,727 人（2015 年 7 月末現在）となっています。三條市内では三條クラブ、三條北クラブ、三條東クラブ、三條南クラブと 4 つのロータリークラブがあり 204 人の会員が日々奉仕活動に努めております。

さて、本日の講演会には、中央大学 3 年在学中の 1978 年に、不幸にも北朝鮮の拉致に遭遇し 24 年間大変な苦勞をされ 2002 年にようやく帰国された蓮池薫様を講師にお迎えいたしました。拉致問題は毎日のようにマスコミが報道いたしますが、一向に解決に至らず、特に新潟県は拉致被害に遭われた方が多く、県民の皆様も心を痛める事件であります。講師の蓮池様には拉致の実態を含め、現在までの拉致問題についてご教示お願い申し上げます

最後となりますが、拉致被害に遭われていらっしゃる方々が一日も早く帰国できますことをご祈念申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。

四つのテスト

一言行はこれに照らしてからー

I 真実かどうか

II みんなに公平か

III 好意と友情を深めるか

IV みんなのためになるか どうか



ー2015-16 年度国際ロータリーのテーマー

国際ロータリー会長
第2560地区ガバナー
第4分区ガバナー補佐
会長
幹事
S A A

K. R. ラビンドラン [スリランカ]
山本和則 [新潟南]
鳥部文雄 [燕]
星野健司
齋藤嘉一
銅冶康之

事務局

〒955-8666 三條市旭町2-5-10

三條信用金庫 本店内

TEL 0256-35-3477 FAX 0256-32-7095

E-mail info@sanjo-minami.jp

URL http://www.sanjo-minami.jp

講師紹介



荒澤 威彦 社会奉仕委員長

講師 蓮池 薫氏 プロフィール

1957年 新潟県柏崎市生まれ。
中央大学法学部3年在学中に拉致され、24年間、北朝鮮での生活を余儀なくされる。帰国後、1年間の市役所勤務を経て、新潟産業大学 嘱託職員・非常勤講師として働くかたわら、中央大学に復学。
2005年に初の訳書「孤将」を刊行。
2008年3月 復学していた中央大学 卒業
2013年3月 新潟大学大学院博士前期課程 修了
2013年4月～現在 新潟産業大学経済学部 准教授

訳書：「ハル 哲学する犬」「私たちの幸せな時間」「トガニ」など20数冊。
著書：共著1冊を含め5冊。うち2009年6月刊行の「半島へ、ふたたび」（新潮社）は新潮ドキュメント賞を受賞。
2012年10月に「拉致と決断」（新潮社）を刊行。



三条市内4ロータリークラブ合同公開例会

蓮池 薫氏 講演会



「拉致と決断」

新潟産業大学経済学部
准教授 蓮池 薫 様

「拉致」によって私が奪われたものは命を除いた残り全てでした。その中でも「夢と絆」が一番重いものです。拉致されてすぐは現実が信じられず、何かの間違いではないかとの思いが数か月続きました。間違いなら早く帰してくれと必死で抗議したり、手を合わせて拝んだりしました。ところが2～3か月経って到底日本に帰す気はないと思った瞬間、つまりあきらめかけた瞬間、私はとてつもない絶望感に襲われました。人間生まれながらにして、大きい小さいは別にしてみんなが自分の可能性を持っています。その可能性を活かして生きることが生きがいであり夢だと思います。そのために努力できる選択肢、選択の自由を持つということがその人にとってもっとも大事な権利の一つです。その夢、選択の自由をすべて奪われた絶望感は、言葉に表すことすらできませんでした。また、家族と引き離された孤独感、自分の生存を家族に知らせたくても知らせられないつらさも苦しいものでした。



1978年7月31日、私は今の家内と新潟県柏崎市の中央海岸でデートをしていましたが、あいにくにもそこに北朝鮮の工作グループが一般市民を拉致するために浸透して網を張っていました。砂浜に座っているとタバコの火を貸してくれと言ってきました。火をつけた瞬間、後ろから忍びよってきた別の人間たちに襲われました。私は顔面を殴られ、彼女は猿ぐつわをされ、近くのくぼみに引きずり込まれ、強い力で押さえつけられました。その後沖合から来たボートに、袋にすっぽり入れられた状態で荷物のごとく載せられました。その後さらに母船に載せられた二人は、別々の船室に分けられ、一路、北朝鮮の清津（チョンジン）に向かいました。私は清津市のある宿舎に連れて行かれ、10日間、平壤に行く準備をさせられました。その間一番怖かったのは朝です。寝ているときは忘れていても朝が来ると拉致されたという現実引きずり戻されるのです。不安なのは何も知らされないことでした。彼女はどうしたのかと聞いても、平壤に行けばわかると繰り返すばかりでした。平壤に着いて私が入れたのは、農村地帯にある招待所でした。招待所は特殊機関が工作

員を養成する秘密アジトのようなところですよ。そこで私は、彼女は日本に帰したと聞かされました。そこで3か月経過するのですが、その間、逃げないようにいろいろな脅されもしました。しだいに抵抗しても無駄だという気持ちになるなか、自分の置かれた現状や先行きのことを知るためにも朝鮮語を身に付けようと思いました。それからというもののテレビなどを教材に1年間、必死で朝鮮語を勉強しました。

拉致され1年9か月経った頃、大きな変化が起きました。結婚しないかと言われたのです。相手はあなたの彼女だと。本当に目の前が明るくなりました。私たちを結婚させたのは逃げないよう監視するのに限界があり、それよりは結婚させて落ち着かせたほうが、無謀な行動はしないだろうとの考えからだったようです。その背景には拉致されたレバノン女性が逃亡するという事件があったということはずっと後で知ったことでした。

子供が生まれたときに、果たして日本に帰れる前提で育てるか、それともこの国で一生生活することを前提に育てるかで悩みましたが、いくら考えても答えは後者でした。それから日本に帰りたいという話は一切口にせずに子育てに専念しました。その頃、子育てにはいろいろな困難がありました。一つは我々が秘密に属する人間なので、秘密保持のため、子どもを家から150キロ離れた全寮制の学校に送らざるを得なかったこと。二つ目は日本人であることを明らかにできなかったことです。反日教育が行われている北朝鮮で、日本人として生きていくのは難しく、したがって在日朝鮮人という偽装経歴で暮らしました。

また、子どもの将来に悪影響がないように、親以外の家族親戚はすべて死亡したと子供に嘘をつきました。我々にとって子供を育てることは「生きがい」となり、その「絆」にすがって生きていくことが生活の全部となり、このまま北朝鮮での人生が過ぎていくものと思っていました。

そんな1998年に労働新聞で日本が拉致問題で騒いでいると報じました。その年は拉致され20年の集会が日本で行われていました。しかし日本で活動してくれるのはうれしいが、逆に我々が奥へ奥へ追いやられるのではないかと危惧しました。事実、山奥の家に追いやられ、ここで死ぬまで暮らせと言われました。ところが2002年になって日本との関係改善に迫られた北朝鮮は、我々の存在を公表することにしました。公表されれば自分たちが生きていくことが親に伝わるという希望が生まれました。2002年9月の小泉総理の訪朝を経て、今度は突然日本に行って来いと言われました。ただし、子供は連れて行けず、逆に秘密を守るために子供には国内旅行に行くと言われました。日本では子供は返してもらうからこのまま日本に残れという兄と大ゲンカになりました。母は24年ぶりに会って兄弟げんかするくらいなら、ここから飛び降りて自殺すると言いました。24年ぶりに会った家族に言い争いをさせる、そんなところにも拉致事件の惨さがあるのです。しかし、その後、故郷の懷に包まれた私は、日本にとどまって子供を待つ決心をしました。まだ日本から何の見返りももらっていない北朝鮮だけに、多少時間はかかっても子供はきっと帰すだろうと思ったからです。子供にとって日本と北朝鮮のどちらがいいかと考えたときに、夢を花咲かせることができるのは、日本しかないとも思いました。このまま日本に残るという決心を話すと、家内は最初強く反発しましたが、決心に至った経緯を話すと納得してくれました。子どもたちが帰るまでは、市役所の仕事に没頭しました。励ましの手紙もあれば誹謗中傷も届く中、家族に支えられました。母親は「私は24年間も会えなかった。お前は子供に1年やそこら会えないだけでくよくよするな」と落ち込む私を鼓舞しました。その後子供たちが日本に来たことで、北朝鮮でできた絆と日本での絆が初めて一つになりました。私は拉致問題の解決で一番大事なことは絆と夢を取り戻すことだと思います。現在、残された人たちの思いを考えると、心配です。私たちは帰国する10日前までは日本に帰れるとは夢にも思わず暮らしていました。しかし、現在北に残されている被害者は我々の帰国をほぼリアルタイムで聞いていたはずで、自分たちもこのように帰れると期待で胸を躍らせていたはずですよ。しかし、何もないなか、11年という歳月が経ちました。期待はすで

に絶望に変わっているかもしれません。家族の絆は永遠ではなく、命が続かなければ繋がりません。また、年を取れば日本に帰ってきて夢を追うことはできません。一日も早い解決を望んでやみません。本当に私は失ってみて初めて絆と夢のありがたさや貴重さを感じました。このような私の体験談が、少しでも皆様のお仕事や活動の参考になればと祈念しながら、私の講演を終わらせていただきます。ありがとうございました。

三条北ロータリークラブ

外山 晴一 会長

只今は、蓮池先生より大変興味深いご講演をいただきありがとうございました。先生の拉致問題早期解決の熱意が伝わり、あっという間の1時間半でした。

拉致問題の早期解決が望まれているにもかかわらず、問題解決の糸口が見えません。今日の講演で先生がおっしゃったように北朝鮮に対しては強硬姿勢一辺倒だけでなく、外交交渉ですから、相手の欲しがっている経済協力援助も一方で提示しながら進め、一刻も早く解決するべきと思います。

日本は災害や飢饉などが外国に起ると援助しております。私たちロータリークラブも災害時はもとより、普段でもポリオプラスといってポリオをはじめとする伝染病の撲滅や識字率向上のために遠くアフリカにまで援助をしています。しかしお隣の北朝鮮に飢饉や災害が起きても、全く援助をしておりません。日本全体も同様です。拉致問題が原因で、善隣友好が出来なく全く不幸な状態が続いております。この意味からも拉致問題の早期解決が望まれます。



出席率

会員51名中21名

※ 一般聴講者 200名 4RC会員 100名

先々週の出席率

84.78% (9/28)

ゲスト

新潟産業大学経済学部 准教授 蓮池 薫 様

先週のメークアップ

10/14 三条RCへ 平松修之君 熊倉高志君 永桶俊一君 西潟精一君
野島廣一郎君 太田義人君 坂本洋司君 谷 晴夫君
田代徳太郎君
10/15 三条東RCへ 野島廣一郎君 坂本洋司君 佐藤秀夫君 佐藤嘉男君
10/17 地区ロータリー財団ミーティング（新潟）へ 田代徳太郎君

我等の生業



谷 晴夫

(昭和29年 3月 2日生まれ)

2004年 7月入会

職業分類

人材育成事業

事業所名

ピーエムシー 株式会社

事業所住所

三条市西本成寺1-35-4

事業所TEL

0256-47-3686

事業所FAX

0256-35-0158

事業所e-mail

tani@pmc-jinzai.com

HP URL

<http://www.pmc-jinzai.com/>

ピーエムシー 株式会社

介護から良い社会環境創りを。

ピーエムシー株式会社は、介護士の育成事業を主たる事業として行っております。

介護施設の真のニーズに対応する介護人材の派遣と教育支援を通じて、将来の介護施設における就労人口の減少に歯止めをかけることを目的に活動しています。

より良い社会環境創りと介護業界のイノベーションを目指し、高齢化社会に対応する事業と研究をこれからも重ねていきます。



人と企業のマッチングをサポート

ピーエムシー株式会社